

# ものうき春

春の一日、気持ちさが晴れないままに唐木順三著『良寛』（筑摩書房）を開き、名高い漢詩を眺めていた。

生涯、身を立つるに懶ものうく  
騰々、天真まかに任ず  
囊中、三升の米  
炉辺、一束いっそうの薪たきぎ  
誰か問わん、迷悟の跡  
何ぞ知らん、名利の塵  
夜雨、草庵くわんの裡うち  
雙脚、等間に伸ばす

世間がいやになってつましく暮らす私だが、この自由は何よりもうれ

南	無
善	財

菅原伸郎

しい、といった意味だろう。一説には良寛さん三十代の作ともいわれるが、定年を過ぎた私にも「ものうく」の気分はよくわかる。読み返すうちに作者が慕わしく思われ、急に越後を訪ねたくなった。

新幹線で長岡駅に降り立ち、レンタカーを借りた。三月末にしては珍しい大雪のなかを西へ走ると、丘の上から灰色の日本海が見えてくる。荒波に洗われる出雲崎の浜に出て、まずは生家のあった場所にたつ良寛堂を訪ねた……。

その日はさらに近隣の町村にも足をのばし、ゆかりの寺、旧家、記念館を見て回った。弥彦の駅前旅館に泊まり、翌日は国上山へ。雪の五合庵や乙子神社の草庵にたたずみ、こんなところに二十三年もおられたのか、と涙が出そうになった。

訪ね歩くうちに、等身大の良寛さんが少しずつ見えてくる。たとえば長岡市和島地区にある良寛の里美術館には、先の漢詩の直筆が飾ってある。鑑賞眼のない私にも伸びやかで見事な筆遣いと見えたが、その屏風の大きさは予想外だった。高さが背丈ほどもある六曲一双で、ほかの詩とともに書かれている。私にとつて「ものうく」の詩は内面の吐露であり、反古の裏にでもそっと書かれて

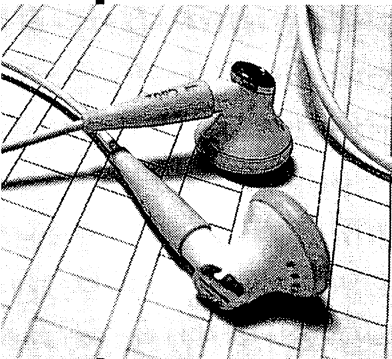
いるように思い込んでいただけに、いささか面食らった。

私にはそもそも、書の心が分からない。だから乱暴にいうのだが、たとえば「無」という字を老師や書家たる人は黒々と大書するものだろうか。仏教の本来からは大いなる矛盾であり、いわば執着とも思える。良寛さんも書画をねだる人たちには音を立てていたようだが、あの遺墨はどんな事情で書いたのだろうか。

ともかくも現場を踏む大切さを学び直し、短い旅から戻った。そして数日後、水上勉著『良寛』（一九八四年、中公文庫）を読み直してみた。以前は寺院や教団への批判をおもしろく読んだものだが、実は先の疑問に対するヒントも書かれてあっ

た。良寛さんを超俗の人とばかり見ないで、詩文についてはいささかの野心もあり、書画を渡しては支援を受けていた、と推測している。

その九年前に発表した小説「箕笠の人」（講談社文芸文庫『才市・箕笠の人』所収）では、水上さんはもつと懐疑的だった。飢饉や洪水が続いた当時の越後を紹介し、一揆で処罰された農民をあえて登場させたうえで、托鉢と詩文と手まりに過ぎず僧侶を皮肉っぽく描いている。



もちろん、社会派の視点で書いたわけではない。修行していた禅寺を飛び出した過去を持つ人だけに、出家の世界には厳しいのだ。宗門の偽善を嫌って行乞に生きた良寛さんを高く評価しながらも、額に汗して働き、モノをつくり、子どもを育て、時には抵抗もする民衆にいつそうの共感があつたようだ。

亡くなって二年になる水上さんには、一度しかお目にかかれなかつた。しかし、馬齢を重ね、トンネルに入りかけていた私は、ポシと肩を叩かれたような感じがした。キミ、在家の生活も悪くないんだよ、世を捨てるだけが仏道じゃないからね、とおっしゃるのである。

（すがわら・のぶお／東京医療保健大学教授）